紅の瞳

しらお

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
紅の瞳

【Ｎコード】
Ｎ７７２３Ｓ

【作者名】
しらお

【あらすじ】
琉華（りゅうか）は、大学の門で呼び止められ、振り向いた。視線の先には、美少年。彼は、紅の瞳を細めて言った。
「お前、俺のものになれ」
龍に妖怪に神様が現れる現代ファンタジー。

夢の中、二つの声が響く。

薄ぼんやりとした光が廊下の先から漏れてくる。カツン、と同じリズムで響く足音。光に照らされ浮かび上がったのは、凛とした面立ちをした初老の女性。厳しい表情の彼女は、目の前まで扉が迫ったことに気付いて、優美な動作で礼をとった。

ほんの少しばかり経って響いた石畳を叩く硬質の音に、彼女は光へ足を踏み出した。

そこは、小さな火が支えもなくひとつふたつ浮かぶばかりの部屋。部屋の隅まで照らさない明かりの下でこの場所が実際どれくらいの広さなのかは分からなかった。

「陽王（ひのきみ）、決心はついたかな」

澄んだ鈴の音が何重にも聞こえるような声がほわりと広がる。主の美声に彼女は無表情に緊迫感を漂わせた。

「あれを、目覚めさせましょう」

主の白い面に三日月の赤が開かれた。

本日は晴天ですが。

北大学人文学部。就職難にあえぐ中でももっとも職にありつけないと言える学部だ。

昨今では、資格を身に着けようがアピールをがんばろうが、本当に必要な人間と判断されなければ採用されない。

就職氷河期という文字が脳裏をよぎり、琉華は苦笑した。いや、どちらかというと泣き笑いに近い。それと言うのも、手の中で光る端末が原因だ。

「また、ダメか…」

画面には、この間面接を受けた会社からのメールが映されていた。残念ながら、と始まり、最終的には、うまくいくように祈っていますと述べられた、俗に言うお祈りメールである。それなりの感触を掴んでいたと感じていた分、今回の失敗はなかなかきつかった。

ふと、手元の端末が光り震える。慌てて操作すれば、発信者の欄に懐かしい名前があり、嬉しそうにボタンを押した。

親友と飲んで楽しい気分のまま帰路に着いた琉華は、目の前にそびえるそれを眺め、これが酔うということかと若干ずれた感性で感心していた。ワクと言われるほど飲める彼女にとって酔っぱらうということはほとんどなかったので、少々新鮮に思ったのだ。

彼女の視線の先には、小山ほどもある巨大な猿のような動物が、どこかの民家の上で踊っている。腰をふり、腕をぶんぶん振り回す

滑稽なそれ。あんなところで踊り続けられたら、音が響いて下に住む人々はいい迷惑だろう。そのくらいにしか思わなかった。だから、気付かなかった。こちら目がけ、何かが飛んでくるという非常事態に。

およそ日常では聞かない物音が、背後で起こり、琉華は、慌てて振り返った。そして、息をのむ。

人が瓦礫の中で転がっている。それも十歳程度の子供だ。先ほどの轟音で壊れたらしい塀の一部。子供の背中に大きな塊が乗り、大小様々なコンクリートの塊が散らばっている。子供は、動かない。これは、なんだ。麻痺した頭でようやく救急車を呼ぶことに思い至ると、鞄に手を突っ込む。だが、鞄に目を向ける、その視界の端にとらえた影に、携帯を握ったまま、視線を戻した。

「てめぇ、よくもやりやがったな…」

獰猛な、獣の声で子供は、少年は確かにそう言って立ち上がったのだ。子供の力では、到底持ち上げられなさそうな塊をやすやすと振り落して。

「っ！」

持っていた携帯が、滑り落ちた。音に反応して少年がこちらを見る。赤色。血と同じように濃厚な紅。電灯の光が乱反射して、宝石のように濃淡を煌めかせたそれは、彼の眼。

ヒュン、耳にした鋭い音。眼で確認するより早く視界を黒が覆った。

本日は晴天ですが。（後書き）

酒に強い人って、ワク、ザル、蟒蛇とかありますけど、どれが一番飲めるんでしょうね。

なんでそんなに上からなんですか。

「ルー、卒論どこまで進んだ？」
「ぜんぜん。テーマ決めて、方法決めたまではよかったんだけど」
「明日も部活かぁ」
「休みたいねぇ」
「これからバイトだから、またね！」
「明日は遊ぼうね」

回りで姦しく響く雑音を意識の外に追い出し、琉華（ルー）は、卒論で使う文献を手に帰路に着く。友達と大学敷地内中ほどで別れ、南門を目指した。ふいに、いつものざわめきとは違う雰囲気を感じ取る。どこか浮かれたようなそれに惹かれ、周りの学生たちが興味津々で見つめる一点を見た。

壁にもたれた一人の少年。それも十歳程度の年齢で、小学生らしくシンプルな服装をしている。だが、彼は子供らしいはずの服装で子供のようには思えなかった。顔が整いすぎているのだ。ウルフカットを施した黒髪、色白だが健康的な肌、目を伏せた彼の表情は大人びていて、それも子供というには躊躇われるものだった。

綺麗な少年だ。ほう、と知らずため息をついたとき。

弾かれるように少年が動いた。交わされる視線。それに息をのむ暇も与えず、彼は行動した。軽やかな音さえ立てて、跳躍する。ルーを含めた学生たちの眼に捉えられないほどの速さで、間をすり抜ける。その動きは、機敏な狩人のようだ。

赫。燃え盛る炎、または閃光のように、その色が目の前に現れて

ようやく我に返る琉華。少年が自分を見上げていた。再度、眼があったと感じたと同時に、少年は傲岸不遜で獰猛な笑みを浮かべる。

「お前、俺のモノになれ」

それが、少年と彼女が交わした初めての言葉だった。

目の前には、先程紹介された神主の男性が座っている。異性とはあまり話さないタイプのルーにとって緊張するしかない場面だろう。

「そんなに緊張しないでください」

涼やかな声で琥珀の髪を揺らした彼の名前は、榊原樹（さかきばらたつき）。琉華がいるここ、双玲神社の主だ。自己紹介のときに言っていた年齢に疑問が生まれるぐらい若々しい彼の口では、ペロペロキャンディーがころころ楽しげに踊っている。和服だが、現代風に整った顔立ちに無表情でキャンディーをほおばる姿は、なんだか不気味で奇妙に思われた。

ふいに、眼があって、彼は、にこりと微笑む。無表情の冷淡な雰囲気から一転して、柔らかく優しい笑顔。頬に熱を感じ、思わず顔をそむけた先には、不機嫌そうな美少年がいた。恥ずかしさから咄嗟にとってしまった行動を咎められているようで、居心地が悪い。

「炎瑯（えんろう）、睨まない」

呆れたように諭されて、エンロウ、と呼ばれた少年は舌打ちをして視線を外した。どこまでも不機嫌で、それを隠そうともしない。
私は、君に呼ばれて来たんだけど。明らかに歓迎していない雰囲気に、眉間に皺がよった。

「どうやら、きちんと話してもないようだね」

ごめんね、と神主が謝る。苦笑したイケメンに、彼女は動揺しつつも、もごもごと気にしていないことを告げた。

「さて、本題に入ろう」

一拍の間。

「まず、彼の名前を教えてくれ」

はい？　彼女の頭に疑問符が浮かんだのは、言うまでもない。

なんでそんなに上からなんですか。（後書き）

次の話は、説明になりそう。あ、お気に入りしてくださった方、ありがとうございます。

平凡にはきついです、これ。（前）

「え、と…？　名前、ですか？」
「そう。君ならわかるだろうからね」

自信に満ちた表情で琥珀の瞳を細め、彼は言う。否定しようとした言葉は、彼に遮られてしまった。

「さっき呼んでいたのは、彼の名前ではなく役職。名前がないのは、とても不便なんだよ」

そこまで言うと、さぁどうぞとルーの眼を見つめてくる。隣の美少年も、彼女の口元を見るだけで、口を開こうともしない。数分待っても何も変わらない状況に諦めて、彼女は、少年を見てふっと浮かんだ適当な言葉を口にした。

「真（しん）、でどうですか」

まっすぐな紅の光を思い出す。自分の心の中まで見通してしまいそうな、強い炎の光。

「真…いい名だね」

神主は嬉しそうに美少年に呼びかける。彼は、自分の名前となった言葉を口の中で反芻し感触を確かめていた。しばらくして、満足そうに。

「ああ、気に入った」

そうか、それならよかった。何か重要な会議が無事に終了したかのような雰囲気に、ほうと一息つく。そして、気付いた。彼が、ルーを無理やりこの神社まで連れてきた理由、また、いきなり名付けしろと言ってきた理由、なぜか納得した彼らについて、何も聞いてないことを。

「…今日は、朔だったか」

が、喉元まで出かかった言葉は、隣の美少年が立ち上がることで引っ込んでしまった。

「あー、うん。しばらく頼むよ？」

「構わん」

妙な緊迫感をもった会話。真が自信に満ち溢れた笑顔で返事をした直後のことだった。

ドゴォッ

轟音が響いた。それも、至極近距離で。思わず閉じていた目を開けば、目の前に漆黒の髪がふわりと広がり、揺らめく姿が目に入った。先をたどれば、真が立っている。さらに、その先には巨大な手が、彼を覆うように広がっていた。

『ナンダ、モウ契約済ミカァ？』

聞こえた野太い声は、その手の先から発せられていた。手の先、巨大で醜悪な猿の顔から。

「ひっ」

なにこれ。猿…？　でも大きすぎる。それに真っ青の毛並を持っ

た猿なんて聞いたこともない。それに、なんて毒々しい色をした目だろう。死んで濁った沼に沈んで腐ってしまった魚の眼のよう。自身に向けられているのは、獲物を見る目だ。人間がついぞ向けられたことのない、天敵が持つ恐怖の光。

思考が目の前の巨大な生き物の姿でもって埋め尽くされたときに、響いたのは、力強いボーイソプラノだった。

「おいお前！　立て、抑えきれん！」

ハッと我に返って、彼女を庇うように化け物の指を両手、肘を使い抑え込んでいる少年に目を向ける。どれだけの負荷がかかっているのか震える腕。次に見た、流れる黒髪の隙間から覗き見る鋭い紅の光に、慌てて腰をあげる。

「逆代（さかしろ）さんっ！」

恐怖で上手く立ち上がれない彼女の手をつかんで、榊原が引っ張った。広い胸に抱き留められたルーの後ろで轟音が立ち上る。部屋の隅へ、さらに次の部屋へ。ちらと後ろを見れば、化け物の手が、地面にめりこんでいた。あんなのに捕まったら。ぞっと背筋に寒気が通り抜ける。

気付けば、物置らしき場所で、周りには水が二人を囲むように撒かれていた。なんでこんなことするんだろう。こんなもので、あの化け物が防げるのか。もし、襲われたらひとたまりもないのでは。

「大丈夫。仕組みは言っても理解できないだろうから省くけど、この中にあれは入ってこれない」

力強い言葉、合わせた視線は、真摯で嘘を言っているようには思えない。それに落ち着いた彼の様子は、信用がおけた。

「…ごめんね。いきなりあんなのが来てびっくりしたよね」

無言で頷く。そうすると、彼は頭を撫でた。よしよしと幼い子供にするように。顔に似合わず、大きく無骨な手は、ほとんど覚えていない亡くなった父親のようで。彼は、守ってくれる存在だと。頼っていいのだと。

ほ、と息をつけた。

「落ち着いたかな」

「…はい」

「よし、それじゃここで待ってよう」

「…あの、あれはなんなんですか」

あの、化け物としか言いようがない巨大な猿。人を捻りつぶせそうな大きな手が傍若無人な力を発揮して、壁を床を破壊していった姿。

「狒々（ひひ）という、妖怪だ」

「ようかい…って、そんな生き物が」

「いる」

視なくなっただけ。科学という言葉が魔法にとって代わったあたりから、人間は妖怪たちを視ようとしなくなっていった。すぐ隣に

存在する異世界を認めなくなった。そして、一部だけが視る眼を持ち続け、それらは霊能力者と呼ばれている。

「存在は、しているんだ。ただ、視ないだけ」

「…私が、今、視えるのは…？」

突拍子もない説明は、今までの価値観を考えれば到底信じることはできない。自身は視ない人間だった。その矛盾に説明を貰わなければ、納得できない。いや、貰えれば、信用できるようになれる気がした。

「簡単なことだよ。認識されていなかったことが認識され、視るようになっただけ」

視点と同じだよ。空を見上げれば地面は見えない。地面を見れば空は見えない。ただ、認識しているから、視点を切り替えて両方を見ることができる。今までは、空しか知らなかったから視点を切り替えるなんて思いもしなかったんだ。

そう続けられた言葉は、分かりやすく頭に入ってきて、すとんと胸の中に落ちた。

「よし、これで認識できたね」

満足げにそう言うと彼は懐から古紙を取り出す。ふたつに折り畳まれただけのそれを広げれば、草書で書かれた文字が並んでいた。あまりにすらすらと書かれていて日本語に見えない。

「逆代さん、真のことだけど。たぶん、もう保たない」

保たない？　突然の言葉に視線が切羽詰まった表情の榊原へ移る。

「あれは、諦めが悪いからね。今までのやり方では倒せないどころか、疲れたところで殺される」

コロサレル。物騒な単語に、あれの腕を抑えていたときに彼の細腕が震えて玉のような汗が流れていた映像が脳裏をよぎる。

「だから、今から言う言葉を復唱して」

ルーが頷く姿を見ると、彼は手元の古紙に目を落として言葉を紡ぎ出した。

『我は、彼らと共に在る者なり。古の盟約に基づき、管理者・龍樹（たつき）より操龍者・竜歌（りゅうか）へ契約を譲る』

榊原の口から出てきたのは、全く知らない言語。中国語のように発音が複雑で、力強い声音。それに引きずられるように、ルーは同じ言葉を口にした。

『彼の者は、陰火（いんか）の一族。祉（ち）の長、勝先（しょうせん）。準仮（じゅんか）を』

止められた言葉に戸惑う暇もなく、勝手に唇が動く。

「ラ・レウォン・フリウド・グーハ・クーファ」

知らない名前を紡いだ。

平凡にはきついです、これ。（前）（後書き）

長くなりましたので途中でくぎりました。話としては続きます。説明って難しいですねぇ。どこか矛盾点などございましたら、指摘してくださるとうれしいです。

平凡にはきついです、これ。（後）

豪腕が唸りをあげ、体ぎりぎりのところを通過していく。それでも、風圧に押され、体勢が崩れかけ慌てて跳んだ。拳は、恐ろしい速度で真を叩き潰そうと執拗に弱点を狙う。途中、手にした日本刀を盾に狙いをずらす。普段より軽い体は、思った以上に吹っ飛んだ。

「ぐ…っ！」

したたかに背中をぶつけ、たわんだ幹から滑り落ちる。回避行動に移りたくても、目眩に吐き気がして力が入らなかった。

『貴様、竜ダロウ』

嘲りを含んだ濁声が頭上から響き、喉に圧迫感を覚え、つんとした獣臭さが鼻をつく。

竜。狒々が口にしたそれは、全ての妖怪を下すほどの力を持つ神のような獣。人がすでに忘れ去って久しいその存在は、彼らにとっては未だに脅威であった。

『ソレニシテハ弱イ。マダ子供カ』

ぐ、と持ち上げられ、締まる首に全体重がかけられる。本性は違えど、今は人の体。パートナーのいない彼の体の強度は人と同じだった。

『竜ノ傍ニ在ル者モ旨イガ、仔竜モ美味ト聞ク』

本来強者である竜を下し、その肉を喰むという心地よさに下品な

笑い声をあげ、狒々は手に力を込めた。徐々に締められていく首に、意識が朦朧としてくる。

契約さえあれば。

十年探し求め、ようやく出会えた相棒を目の前に、自分は終わるのか。

契約さえあれば。

大切な居場所を荒らされたまま、終わるのか。

契約さえあれば。

こんな下等の狒々なんぞに一族を貶されたままなのか。

契約さえ、あれば。

ようやく名を貰えたのに。あそこから抜け出せるというのに。あの目から逃れられるはずなのに。

契約さえ――――。

変化は一瞬だった。

『グウッ！？』

狒々は苦悶の声をあげ、跳びすさる。竜を捉えていた手には、上腕部まで届く三筋の裂傷が走っていた。遅れて血が迸り、狒々は痛みにのた打つ。

「思った以上に弱ぇなァ…まぁ、まだ守歌（もりうた）がないしな」

響いたのは、少年の高い声ではなく、魅惑的な成人男性の声。嬉しそうにくすくすと嗤（わら）い、狒々を睨む赫が煌々と輝いていた。

そして、狒々は目にする。圧倒的な存在感を放つ、雄々しき竜の姿を。

一瞬の揺れと怒号を境に、急に静まり返った外。ルーは、不安そうに庭の方面の壁を見つめる。あれほど小さな背中が、巨大な猿を相手取っているのだ。最悪の事態しか思い浮かばない。しかし、隣の神主は悠然と構えていた。知り合って間もないルーには、わからない信頼があるのだろうか。

「あ、あの…」

彼は、器用に片方の眉を持ち上げ、続きを促す。

「大丈夫、なんですか…？」

これをすれば助けられるから。そんな風に言われて儀式みたいなあれを行ったものの、目に見える効果がまったくないこの状態では、実際どんなものなのか実感できない。

「そうだね。もう大丈夫だろうから、そろそろ行こう」

そう言われ、おとなしくついていった先には、とんでもない光景が広がっていた。

巨大な猿の遺骸が転がっていた。死んでいるとすぐにわかったのは、首筋にざっくりと傷が開かれており、それは、首がほとんど皮一枚でつながっているような状態だったからだ。すぐに視線をずらした先に、彼女は感嘆の溜息をもらす。

猿の背中に堂々と立つ、見知らぬ男。長い黒髪が、夜風に揺られ舞い上がる。むき出しの背中は、不要な脂肪や筋肉をそぎ落とし、しなやかな猛獣を思わせる。腰に巻かれた黒い布は、どこか見覚えがあった。ふと、視線を感じたらしい、男がこちらを向く。

「え、真…？」

赤い、赤い目がルーを捉える。その瞬間に自身の口から洩れた言葉に、自分で驚いた。だが、自然とこの男があの少年だと確信している。ひょいと跳んだ彼は、二人の目の前に降り立つと、自信に満ちた声音で言った。

「終わったぜ」

いったい、私はなにに巻き込まれているのだろう。少年から一気に成長した彼の姿に、呆然とそう感じた。

「真が、竜？」

改めて、説明を受けているルーは、目の前の青年二人に胡乱げな顔を向けた。昨日は、騒ぎが収まったのが深夜だったため、親に断りのメールを入れておいて、神社近くの神主自宅へ一泊したのだ。

「んだよ、認めてねぇじゃん」

それに、すぐさま反応を返したのは、黒髪赫目の美丈夫。先日まで美少年だった男だ。今では、幼く丸みを帯びていたフェイスラインが鋭く武骨な成人男性そのものとなっている。不満そうにテーブルに頬杖をつくその手も大きく、少年らしさは残っていない。

「まぁ、一夜明ければ夢だと思うのも無理ないよねぇ」

対する答えを出したのは、茶髪茶目の神主。自宅だからか、神主の衣装ではなく渋い色合いの着流しだ。口元には、体に悪そうな色をした棒付きキャンディがころころとしている。出会った当初から思っていたが、どうにもそれが和の衣装とちぐはぐだ。

「さすがに、あれを夢とは思いませんよ」

あれだけ実感を伴った悪夢はあってほしくない。それよりも、化け物が存在することは認めたが、それが目の前の青年がその化け物に類するものだというのが信じられないだけだ。化け物らしい化け物のイメージしかないルーにとっては、当然と言える。

「まいったな。見せろと言われて見せられるものじゃないし」

話を詳しく聞けば、竜というのは、異世界からやってくるものらしく、ここにいる間は、本性に戻れないらしい。ただし、それはパートナーがいない場合だ。

「パートナーと言っても、きちんとした契約を結んだ場合ね」

神主の榊原が言うには、契約は、三段階あるものだという。だが、今のルーと真の契約は、第一段階をようやく済ませたばかりだ。

隣接し重なっている異世界の存在を認め、竜の関係者から躁竜者として指名を受け、躁竜者が竜の名を呼びかける。そして、竜からの応えがあって初めて成立するのだ。

「あの、昨日から思ってたんですけど、躁竜者（リネリア）ってなんですか？」

説明してなかったっけ。そんな前置きをして、榊原はしっかり伝えてくれた。躁竜者とは、躁竜の術を持つ者…いわゆるパートナーとなれる存在のこと。さまざまな方法で、竜の力を抑え、増幅させ、制御する。

「そして、竜にとって比翼連理の相手だ」

比翼連理。理想の恋人。運命の相手。そんな単語が脳裏をよぎる。そうして、思い出したのは、昨日彼に言われた一言だ。

「俺のモノになれ」

という、傲慢極まりないセリフを。

平凡にはきついです、これ。（後）（後書き）

一応、この話はこれで終わりです。むずかしいですね、一気に説明しちゃうと絶対覚えられないし。かと言ってある程度は書いておかないと次が書けないという…。

説明プリーズ。なんだか不穏ですね。（前書き）

内容を大幅変更しました。今までの内容を楽しんでくださっていた方々には申し訳ありませんが、どうしても話の展開に無理があるので、こうなりました。ご了承ください。時期を見まして、このまえがきは削除します。

説明プリーズ。なんだか不穏ですね。

あれから、数日。今では、あんな襲撃や化け物など夢としか思えない。だが。ふと隣を見る。黒髪に赤い目、目鼻立ちの整った美青年と言って差し支えない彼の存在が、その記憶が本当だと訴えてくる。

「どした」
「なんでもないわよー」

彼は、竜と呼ばれる存在だ。ルー自身、彼が人と同じ姿をしているからか、そのことは半信半疑ではあるが、あのとき化け物を倒したのは彼自身である。異形の姿となったあの腕は、記憶に新しい。家の屋根に届きそうなほど大きな化け物を一瞬で倒せるほどの強さを秘めたあれ。なんでも、竜というのは、そこらの化け物や妖怪よりもよっぽど強いらしい。

そんな神にも名前が見え隠れする竜が、なぜ平凡な彼女のそばにいるのか。

彼女が、今まで、妖怪や幽霊の類を見たことがあるかと言ったら、答えはノーだ。超能力やなにやらを持っているかと言ったら、それもノーだ。妖怪とか超常現象に対する興味は人並み程度しかなく、容姿も十人並み、身体能力はやや落ちこぼれ気味、専攻は就職活動にあまり役立たない日本文学。持っている資格は、漢検に秘書検定ぐらいだ。正直、これでは就職活動においてかなり弱い気がしてならない。それだけの、まあどこにでもいる人物、それが逆代琉華（さかしろりゅうか）だった。しいて特徴をあげるなら、珍しい氏名のため、他人に名前を覚えてもらいやすいぐらいだろうか。

だが、彼は、真(しん)と名付けた竜は、ルーの傍らにいる。なんでも、竜といっても別世界から来るらしく、ここに来る際に力がセーブされてしまう。そのセーブを解放できるのが躁竜者(リネリア)と呼ばれる存在だ。それがルーなのだと彼は言う。

ぶっちゃけ、そんな力の片鱗のようなものは一切感じてないし、彼と出会って躁竜者として契約させられても妖怪や幽霊が見えるようにはならなかったし、魔法のようなものが使えるわけじゃない。彼女は、それも半信半疑だった。

「あ、そこの本とって」
「えー」
「いいじゃない、私じゃ届かないの。ほら、さっさと取る」

渋々といった感じで最上段にある分厚い本を取り出して、渡してくる真。どすん、と少々乱暴に手渡され、ルーは、慌てて両足を踏ん張った。

「……つまらない？」
「圧迫感があンだよ。あいつの仕事部屋みたいでヤダね」
「だったら、ついてこなきゃよかったのに」

心底嫌そうに顔をしかめた彼に、呆れ気味にルーが言うのは当たり前の反応だろう。だが、真は、不思議そうに言った。

「離れたら喰われンぞ、お前。それでもいいのかよ」
「喰われ…って」
「妖怪とか化け物とか。躁竜者ってのは、大概美味いって噂があるし、竜を降(くだ)すのに使える存在だ。なんといっても、俺たちはお前らがいないとなんもできねぇからな」

あのときの判断、早まったかしら…。いやでも、半強制的に流されるようにいつのまにやら躁竜者になってたんだから、恨むのは榊原さんねそうだきっとそうに違いない。後で料理に苦手なたまねぎ入れてやろう。そう決意したのだった。

そうして、ふと気づく。

「そういえば、家に来たのもそれが理由なの？」

「まぁな。半分は棲んでる場所が崩壊して穢れを浄化する必要があるってのもあるけど」

「せ、説明プリーズ」

半分以上も理解できなかった。今度は、真が呆れた表情で説明を始める。

「……わかったよ。俺と樹は、神社とそこに隣接してる居住スペースに住んでる。そんで、人間が妖怪って呼んでるやつらは、陰の存在。それの死体が置かれた場所は、それから出た瘴気っつーか、なんつーか嫌なものが溜まンだよ」

「嫌なものってことは、放射線とか毒ガスみたいに体に悪い影響でもあるの？」

「そーだよ。だから、土地が自浄するまで待つしかねぇんだ。いくら力があるっつっても、俺は浄化できねぇし」

「竜も万能じゃないのね…」

移動しながら会話し、勉強用に設置された机に座る。これは、一人掛けだ。それに集中したい。ルーは、そばのテーブルで本でも読んでほしいと言った。まぁ道理だな、そう言って素直に本棚へ消える。

ふぅ、と溜息をつく。やっぱり美人のそばにいるのは慣れない。顔立ちがいいので、間近に迫ればどぎまぎするし、そばにいるだけ

で周囲の視線を独り占めしてしまう。要は、気疲れだった。
まぁいい、集中しよう。目の前の書物に目を通し始めた。

ふと、騒がしいなと感じて、顔を上げた。騒ぎのもとに目をやれば、人だかり。それも色とりどりに派手な服装をした女子大生ばかりが何人も生垣を作っていた。いったい、中に何があるんだ。見回せば、周囲の視線もそこに集中している。迷惑そうなものも、羨ましそうなものも、陶然とした表情のものも、様々だ。
集中力が切れてしまった。時間を確認すれば、すでに三時間は経っている。だいぶ課題が進んだ、今日はこれで区切りとしよう。ルーは、そう思って荷物を手に席を立つ。近くを通り過ぎるとき、ふと黒髪が見えた。ついで、意志の強い赤い瞳と視線がかち合う。

真、だった。騒ぎの元が連れだと知って少々驚く。が、すぐに、そういえば、芸能人よりよっぽど美人だったと思い出した。

真は、無言で生垣を抜け出すと、むろん彼女たちはついてきた。が、彼は、一切無視して、ルーに向かって手を出す。茫然としていれば、眉間に皺が寄り、持っていた分厚い書籍を奪われた。

「返すんだろ」

思わず視線で行動を追っていた彼女に気づいて、ぽつりと零す。そして、それは、元あった場所へ戻されたのだった。いいなー、私もああやって助けてほしー。てか、あの子誰よー。イケメン連れて羨ましい。後ろで取り巻きたちがきゃっきゃと話し出す。

「わっ」
「行くぞ」

気付けば、腕をつかまれていた。不機嫌そうに後ろの女子大生たちを一瞥して、（そこで歓声があがって眉間の皺が増えたのは言うまでもない）大股で歩きだす。ルーは、引っ張られるままに足を進めた。

±±±

近くのカフェテリアで、昼食を食べているときだった。

「おっはよー」

言葉とともに、ばしっと肩を叩かれる。飲んでいたジュースにむせながら、隣の席に移動してきた人物を見やる。肉感的な体つきに長く艶やかな黒髪をさらりと後ろに流し、涼しげな目元に泣き黒子、浅黒い肌でも、それを活かした服装をしていて、しっかり者の姉のような雰囲気の女性。ルーの親友である、宮代沙夜（みやしろさや）だ。とても美人だが、現在恋人募集中である。

「お、おはよ、沙夜。今日は講義ないんじゃなかったの？」
「まぁね。珍しく休み、だったんだけど…」

そして、ちらりと横目で真を見る。もくもくとハンバーガーを頬張っている彼は、視線に一切答えず、ただファストフードの独特な

風味を味わっていた。

「聞いたわよー、彼氏、できたんだって？」
「ごふっ」
「やだ、ルー。大丈夫？」
「だ、大丈夫…ていうか、どこからそんな噂を…」

ただ、図書館に一緒にいただけなんだけど。恋人の素振りもなにもなかったと思い返すルーだが、残念ながら人間は異性が二人仲良く一緒にいると恋仲を疑うものである。
沙夜も当然のように図書館で一緒にいたって騒いでた馬鹿がいたからと言った。彼女たちは、あれ彼氏？　違うよね、でも彼氏だったらどうしよ。なんか仲良さげだったー。などと騒いでいたようだ。

「じゃ、とりあえず、これは彼氏じゃないと」
「そうよ。むしろ、知り合って数日よ」
「数日…まぁ、一目惚れじゃなかったら恋仲にはならないわね」

改めて、真を観察する沙夜。見惚れているわけじゃない、完全に観察だ。イケメンより平凡、と豪語する彼女らしい。

「綺麗な目ね。生物学的にこの色はありえないんだけど。カラコン？」
「……」
「くぉらー、無視んな。イケメンの分際で」

それ褒め言葉だよ…。そう言えないルーだった。目の色から、いきなり人外というワードにまで、考えが飛躍するはずがないのだが、彼女は美人なのに恋人がいない、というか友達も意外と少なかったりする。それは、彼女がちょっと変わってるからだ。

気になったら追及する性分だ。仕方ない、別の話題を持たせよう。

「そういえばさ、聞いた？　あそこの丘の上の神社に変事があったらしいって」

「知ってるわ。数日前、謎の発光があったんでしょ。行ってみたら、嵐もなにもなかったのに、木が何本も引き倒されてたって」

「そ、そうなの…そこまでは知らなかった」

「きっと妖怪の仕業ね！」

オカルトマニアなのだ。ゲーマーでもある。ある種のオタクと言って差し支えない。彼女は、原因と判断した妖怪について話し始めた。目を輝かせて熱弁をふるう。正直、普通の男には扱いにくいことこの上ない。彼女の希望である平凡なら、なおさらだ。

「でね、絶対、もっふもふよ。あー、触りたい！　ケセランパサラン」

何語だろう。疑問に思っても口にしない。それが彼女と上手に付き合う方法だ。

「あ、そうだ。私、ルーにこれ話しに来たんだった」

ふいに、熱弁が止まり、彼女は、鞄を探る。出てきたのは、綺麗な組木細工の小さな箱。漆の塗られた、とてもきれいな箱だ。

「すごい綺麗ね」

「でしょう、これはね、木のパズルなのよ。パズルを解いたら箱を開けられるってわけ」

確かに、様々な細工が施されていて、透かし彫りとなった箇所が

動かせるようになっている。複雑な形の穴に、模様をいくつか動かしてはめ込むのだろう。
手を伸ばして触ろうとしたとき、ばしっと破裂音がして箱が飛んでいった。真が振り払ったのだ。

「な、なにするの！　壊れたら…」
「触るな」
「え…」

鋭い眼光で射竦められる。びくりと身体が震えた。

「あれには、触るな。お前も元の場所に戻しておけ。そのとき、剥がしたものも、全てだ」

茫然としていた沙夜にも、厳しい視線を投げかける。はっと我に返り、慌てて木箱を取りに行った。彼女が席に戻っても、真は動く気配も言い訳する気配もない。一体何事なのか。
その後、昼食は気まずいまま終わり、ルーは、真に引きずられるようにして帰っていった。

説明プリーズ。なんだか不穏ですね。（後書き）

この時点で、なんの話か気づいた方は2ちゃねらーではないでしょうか。

騒動が、こっちめがけて突っ込んでくるようです。

なんで分かったんだろう。親友と別れたあと、電車の中で、手のひらサイズの箱を撫でながら考える。

確かに、これは、沙夜の実家の蔵から出してきたものだ。物々しい雰囲気で鎮座するあそこを探検するのは、とても楽しかった。いくつか使えるものがあるかもしれない、そう思ってもいた。蔵の最奥、それも棚の後ろに隠すようにして落ちていた。叩きの柄を使って、なんとか手が届く位置にまで出したとき、何かが剥がれるような音もした。手にした木箱にくっついていた紙切れを剥がすこともした。だが、それは、彼女一人で行ったものだ。両親も祖父もいなかった。

それなのに。なぜ。

あの宝石のような赤い目を思い出す。きつく睨む眼光は、肉食獣のように思われた。喰われるかと思ったほどだった。

人間には天敵はいない。自然災害が唯一の天敵かもしれないが、生物としては人間は頂点にあるといっても過言ではない。だが、あれは喰う目をしていた。人間が久しく忘れていた狩られる側の恐怖。確実にそれが背中を掠めた。

かちり

「まぁ、明日ぐらいに行こうかな」

実家は、遠い。帰っていたのは、連休だったからだ。ついでに就職先も探していたが、まったく成果は上がらず仕舞いだった。そう結論づけて、彼女は立ち上がった。電車の扉を潜って、ホームに降りる。かつかつとヒールの音を響かせて颯爽と歩いて行った。

「ちょっと、忘れ物――――」

親切な女性の言葉も聞かずに。

±±±

テレビをつけて、夕食を頬張る。宣言通り、たまねぎをたっぷり使用したポトフやフライものなど嫌味なほど用意した。住居が崩壊し、躁竜者であるルーを守ることも目的のひとつとして、居候となった神主は、さっきから青い顔で料理をつついている。隣の真は、美味しそうにおかわりまで要求していた。なにか、俺に恨みでもあるの…とぼそりと零したが、それには答えない。にっこり笑って、ポトフを食べる。食べないと冷めますよ。そういった意味をこめて。

ふと、真が、つまらないのかバラエティからチャンネルを変える。

瞬間、なんともいえない悪寒が体を駆け巡った。

『という具合に、被害が広がっており、現在、桂城線付近は通行禁止となっております。ちょっと、私も…』

表示されていたのは、近くの地下鉄の駅構内。止められた電車の車内に呻く人々の声がする。画面が切り替わって、女性アナウンサーが、顔面蒼白になりながらも口上を述べていく。どんどん顔色は悪くなり、青を通り越して紙のように白くなっていた。

「あの人、大丈夫かしら…」

ルーの言葉だけが、リビングに響く。今にも倒れそうなアナウンサーに、目が釘付けになる。と、急に視界が閉ざされた。抗議しても、手はしっかりと目元を覆ったまま。樹（たつき）、チャンネル変えろ。わかった。そんなやりとりだけがくぐもって聞こえた。

ようやく手が外されたときには、ニュース番組ではなく、さっきまで見ていたつまらないバラエティになっていた。

「……見るな」

視線で疑問をぶつければ、たった一言だけ返される。昼食のときと同じ目だ。ひどく真剣で鋭い瞳。神主に視線をやっても、同じように否定されるだけだった。

「ごめん。話すことはできない。だけど、やめてくれ」

彼の手の中で、リモコンがみしりと不穏な音を立てた。

ちゃぷん、と湯につかる。程よい温度は、疲れた体にとても心地よかった。

なんだったんだろう。わからないことだらけだ。

今日見たニュースも、あの箱も。なぜ触ってはいけないのか。なぜ見てはいけないのか。説明もできないと言っていた。

かと言って、あの事故に関わらないということはできない。あの路線は、彼女が大学へ行く際に使う路線だからだ。もちろん、しばらくは封鎖されてしまうだろう。大学のＨＰをチェックしなければ。ああ、面倒くさい。

「はぁ…」

あんまり入っているとのぼせそうだ。もくもくと漂う湯気を目で追いながら、立ち上がる。と。

壺。箱。綺麗な細工物。けれど、なんだか禍々しい。近寄ってはいけない。蓋が開いている。端からなにかが溢れている。なんだ、あれは。見たことがない。いや、見たことはある。けれど信じられない量だ。近づいてくる。嫌だ。中は見たくない。一歩一歩。だめだ、止まらない。どんどん溢れてくる何か。だんだんと近づいてくる壺。笑い声が無数に響いている。遠く近く。揺れながらだんだん囲まれていく。怖い。引き寄せようとしている。奥へ奥へと呼んでいる。呼ばれている、呼ばれている。

「ルーッ！」

乾いた音がした。目の前に端正な顔がある。黒髪に赤い目。真だ。眉根を寄せ、心配そうにしている。視線があうと、問いただすように質問された。

「呼ばれていたな」

「え…な、に…」

「…見たんだろう、箱を」

箱。綺麗な箱。木製の細工物。今日、友達が持ってきた箱。そうだ、あの箱じゃないか。呼んでいたのは。

「見つかってたってことか…」

ぎり、と歯を食いしばる。険しい表情で、後回しにするんじゃなかったと呟く。湯気のせいで、彼の髪はしっとりと濡れていた。
湯気？　ふと、ルーの思考が止まる。

「変態――――ッ！」

ぷるぷると震える神主の視線の先には、漫画のように、手形に赤く腫れた頬。必死にこらえているが、目が笑っている。そして、抑えきれずに声が漏れている。

「……笑うな」
「ぶはっ」

あひゃひゃひゃ、と盛大に笑い始める。腹を抱えて机をばんばん叩いて、大笑いだ。視線は、頬と目とを行ったり来たり。腹が立ってきた真は、テーブルの下で報復をすることにした。

「ごぶれしました」

今度は、痛みに悶える神主に胡乱げな視線をやって、ラフな格好になったルーは、真から、少し離れた位置に座る。おい、と声をかければ、変態としか返ってこない。
真としては、躁竜者の危機を救ったのだから褒めてほしいくらいなのだが、彼女は、怒ったままだ。怒りを解きたくとも、いかんせ

ん彼女がなんで怒っているのかもいまいちわからない。
まぁいい、わからなければ聞けばいいだけだ。これまでもそうやって解決してきたし、これからもそうするつもりだ。

「ルー」
「なに」
「…さっき倒れかけたとき、箱を見たんだよな」

やっぱり、後にしよう。そして、本題へ戻る。真の問いかけに、彼女は肯定を返した。細かく内容を伝える。
女、子供の声がしたこと。組木細工の箱が開いていたこと。その箱は、昼間、友達が見せてくれた箱で、真に触るなと言われていたこと。中身はわからなかったが、とても恐ろしいと感じたこと。引き込まれそうになったこと。

「それは、コトリバコかもしれないな」

いつのまにやら復活していた樹の言葉。
コトリバコ。漢字で表記すると、子取箱。箱を開けた相手の子孫を根絶やしにすることから名付けられた。主に地方の集落などで多く作られていたと聞く。中には、死んだ子供の指や、殺された女の髪など、悲惨な死に方をした女子供の遺体の一部が入れられ、その怨念が箱の中で大きくなっていく。
その箱を開けた相手の子孫が根絶やしになるたびに、呪いの力も強まっていく。

「人間で作られた蠱毒のようなものか」
「そうだね。それが一番近い」

ただ、今回はどうもそれとは一線を画している。ルーは、箱を開

けていない。それどころか、触ってもいないのだ。

「なにか、手を加えられたものか、別物なのか…」

考え込んだ三人の耳に、インターフォンの音が届いた。

騒動が、こっちめがけて突っ込んでくるようです。（後書き）

内容追加。今回の題材は、洒落怖で有名な話をもじっています。もちろんオリジナルの部分もあります。フィクションですよー。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7723s/

紅の瞳

2011年10月3日03時29分発行